

「飼育活動のはじめ方と終わり方について」

中川美穂子

1 前提

哺乳類や鳥類などの動物飼育活動は子どもの心身の成長を促進させるために、必要なものである。

何をどのように与え、どのように次に引き継がせるかを、教師が見通しをたてて、子どもに与えるが、これは学校の教育システムとして行われるべきだろう。

2 始め方

- ・大変すぎる飼育を避けること。「すぐに終わる世話とたっぷりのふれあいを！」

- ・動物種と、飼育環境は、適度な負担のものを用意し、子どもと感情の交流ができるものを選ぶ。飼育活動開始時に、ふれあい授業を用意して、獣医師等の支援で動物の心情と体を解説してもらい、子どもに楽しくふれあわせる体験をさせて、関心をわかせる。

3 維持し方

- ・日常の世話のなかで、必ずふれあう時間を確保する。つまり掃除はすぐに終われる飼育舎にして、たっぷりのふれあい時間を作れるようにする。

- ・言葉を持たない動物達を、よく見てあげて、こまっていることはないかと、観察して情報を友達と共有する。

- ・休日には「命には休みがない」と子どもに伝えるために子どもの休日の世話当番に、親が付き添う。これは保護者の教育への参加と案内する。

これらは、飼育学年を決めて、毎年導入から次学年への引き継ぎするなど学校のシステムとして行くと、特定の飼育担当だけに負担がかからず楽になるが、良い成果を学校全体で確認できる。

- ・トラブルに際して、学校獣医師に意見と支援を求めて対応する。

以上のような条件を大事にすれば、子どもは日々様々な発見をし、体の使い方を工夫し、心を成長させることができる。飼育引継ぎ集会にはその成果が現れるだろう。

4 飼育の終わり(多くは学年の終わり)

(1) 学校のシステム意外の場合：子どもたちに、自分たちがかわいがってきた動物達の幸福な行く末を第一に、どうするかを考えさせる。

(2) 学校のシステムとしての飼育の場合：次学年に自分たちが培ってきた知識と技術を引き継ぐ集会と作業を伝えるため、1ヶ月程度一緒に世話の作業を行う。

5 動物の状態よっての終わり方のケース

(1) 学校のシステムでの飼育ではない場合、子どもたちに動物達の行く末を考えさせるなかで、様々な選択肢を考えさせるが、実際の動物あるいは子どもの傾向を記す。

①飼育舎、あるいは動物をくれた人に戻す
いったん人間にかわいがられた動物を、飼育舎に戻す場合、先住の動物とトラブルを起こす。愛玩された動物にとって孤独と恐怖を味わう、辛く酷い選択である。また、あげた動物を返すといわれた人も困るだろう。

②担任が次の受け持つクラスで飼う
次のクラスの子達は、動物への知識も体験もないから酷く扱うかもしれないが、今まで飼っていた子たちは、もう自分たちの動物でなくなるのだから、触れないし、口をだせなくなる。それでもいいのか？と問い、否定を待つ。

③だれかが飼えば良い。
誰かって誰だ？無責任ではないか？

④動物園に返す

(1)と同様、かわいがってくれている人と別れる動物は辛い。また不必要になったとって、愛して世話をしてきたその動物を人に預ける君たちは無責任ではないのか？愛するとはそんなものか？

6 教師からの問いかけ

君たちがかわいがってきた動物の幸せを考えてあげるのが、彼らへのやさしさだし、責任だろう。もしも誰も引取り手

がないなら、知らないところで辛い思いをさせるなら、かわいそうだけど死なせることも考えたい。

- (1) 引取りたい→親御さんの許可を得ること.
- (2) 自分は引取れないので、他の人も引取らせたくない→動物の幸せを一番に考えよう.

7 解決案

すべてのケースで、30~40人学級に一人や二人の家庭が、子どもの気持ちを大事にして引取ってくれている。

中には、欲しい子が複数申し出て「育てる会」をつくって、2ヶ月づつなど期間を区切って、お互いの家で大事に世話してやり取りするケースもみられる。この場合、動物の病気や、動物の死を皆で共有し、何年たっても皆でかわいがる。



この育てる会の友達は、一生の友達になり、貴重な財産となる。

8 最後に

動物を飼って子どもを育てるという中には、このような終わり方で愛情や生き物への心配、責任を考えさせる意味を含んでいるので、飼育教育の仕上げでもあるので、丁寧な終わり方を考えたい。

命の教育に使った生きた教材について、簡単に、飼育舎に戻す、あるいは、導入先に変換するというのは、愛情の醸成や責任感、自己肯定感育成を目的とした教育とは無縁になると危惧している。

(全国学校飼育動物研究会事務局長)

